

# 中央区遊歩

古くからの老舗が多い日本橋、時代の最先端をゆく店舗が多い銀座を抱える中央区はまさに洗練された町と言える。

日本の歴史教育では（私は日本の教育しか受けた事がないのだが）、庶民の生活は殆ど教えられなかった。私が中央区の歴史を紹介しようと思ったのは、この中央区には江戸時代以降の時代時代における政治や災難に翻弄される庶民の生活を垣間見られる題材があまりにも多いことに気付いたからだ。

日本橋には数多くの武家屋敷と庶民の町が混在し、元吉原の人形町、岡っ引きで有名な八丁堀、牢屋敷で有名な伝馬町、明治時代に栄えた料亭街の浜町と興味が尽きない。

また銀座は江戸時代初期より東海道をはさみ、一丁目から四丁目までは銀貨を鑄造する銀座と当時金座と呼ばれた両替商が軒を連ね、五丁目から八丁目までが槍やなべなどの鉄器の製造工場や職人の住まいがあったとされている。保延六年（1800年）に蠣殻町（現在の人形町）に移転してからは天領地となり、元の金座〔両替商〕が立ち並ぶ町に戻り、そこに幕府御用達の商店が数多く出来上がっていった。その後幾多の試練や区画整理、防災対策等によって現在の世界的に有名な銀座がある。

『住めば都』という言葉があるが、大阪で生まれ育った私にとって、正に住んでみれば都だったのだ。私は東京生まれではないが、このページでは出来る限り、現在の中央区を皆様のご要望に沿って事実のみを紹介して行こうと思うので、これを紹介して欲しいと言う場合は、ぜひご連絡を下さるようお願い致します。また各資料の寄せ集めであり、確実に事実であるとは断言できないが、信用度の高い資料により、ご紹介したいと思う。

中央区遊歩は時間の許す限り詳細に書いていこうと思いますので、長い目で見ていて下さい。

東京駅から隅田川までの東南の方向に位置し、江戸で最も早くから栄えた地域が中央区だ。

もともと飛鳥時代からあった東海道が江戸を迂回して三浦半島から上総の国(現千葉県の市原市辺り)まで水路であったとされるように、江戸の玄関とされる中央区は砂州や海岸であった。江戸は今日の東京のような地形ではなく、東京駅周辺が江戸郷前島村と言われたり、日比谷入り江または日比谷湊という名前が存在したように、江戸城周辺の外堀辺りまで東京湾の入り江があったと推測される。また江戸の由来も入り江を意味する江と、入口を意味する戸から入り江の入口という意味で江戸となったとされる説が有力とのことだ。

平安時代後期、武蔵の国の秩父地方から入間川(現荒川)沿いに川越を通り、平野部に進出してきた桓武平氏の血を引く豪族の秩父重綱の四男秩父重継が武蔵国豊島郡江戸郷を相続し江戸氏を名乗り、拠点を現皇居付近に置き、水運の便を利用して栄えていった。これを武蔵江戸と称した。



(古い町並みが残されている川越)。

余談として常陸の国、那珂でも那珂通高が江戸姓を名乗った。水戸に移り住んだ常陸江戸氏はその後豊臣秀吉と組んだ佐竹義重に攻め滅ぼされ、福井や秋田に移り住んだ後も江戸姓を名乗ったと言われるがそれ以降の消息は分かっていない。

日本橋地区は武蔵国豊島郡江戸郷前島村と称してここを中心に鎌倉時代頃から町人の町が形成されていく。また銀座地区は江戸時代になって初めて殆どが埋め立てられて、造成されたとされている。

武蔵国江戸氏はその後本拠地を多摩郡喜多見に移して江戸市中をほぼ制圧していった。しかし鎌倉幕府が滅びると機を一にして徐々に衰退していく。

一方、室町幕府から関東管領を仰せつかった上杉家の一族扇谷上杉家の有力な武将であった太田資長(1431~1486年、出家後道灌と名乗る)は父、太田道真と共に川越城を築き、続いて武蔵国江戸氏の元拠点にも江戸城を築いた。太田道灌は長祿2年(1456年)から僅か一年で江戸城を完成したという噂もあるが、俄かに信じられない。

また室町時代には神田川、日本橋川の前身の平川が日比谷入り江に流れ込んでおり、現在の東京駅と皇居の間の丸の内を流れていたと考えられる。前嶋（現東京駅付近から日本橋方面）と日比谷入り江は江戸湊と呼ばれ、浅草や、品川湊と共に武蔵国江戸の代表的な湊になっていた。この頃には浅草と鎌倉を結ぶ鎌倉街道、江戸城と川越城を結ぶ、川越街道、元々足柄路とよばれ、赤坂から今日の国道246を通り矢倉沢を結ぶ矢倉沢往還も太田道灌の時代に整備されていた。

その後の変遷はここで省くとして、徳川家康が、天正18年（1590年）小田原攻めの功績として後北条家の所領である関八州を豊臣秀吉から与えられ、居城を駿府城から太田資長（太田道灌）が築城した江戸城へと移した。

関八州とは厳密ではないが、上野（現在の群馬県）、下野（現在の栃木県）、常陸（現在の茨城県）上総（現在の千葉県）、下総（現在の千葉県）、安房（現在の千葉県）、武蔵（現在の埼玉県及び東京都、別称は武州）、相模（現在の神奈川県）を指す。

慶長3年（1598年）8月18日豊臣秀吉の死亡によって朝鮮半島より撤退し、終息した朝鮮、満州で展開された文禄、慶長の役により、各武将たちの間に戦費や人的負担の分配などで不満が高まっていた。



(浅草、右が東武浅草駅)



(皇居、桔梗門)



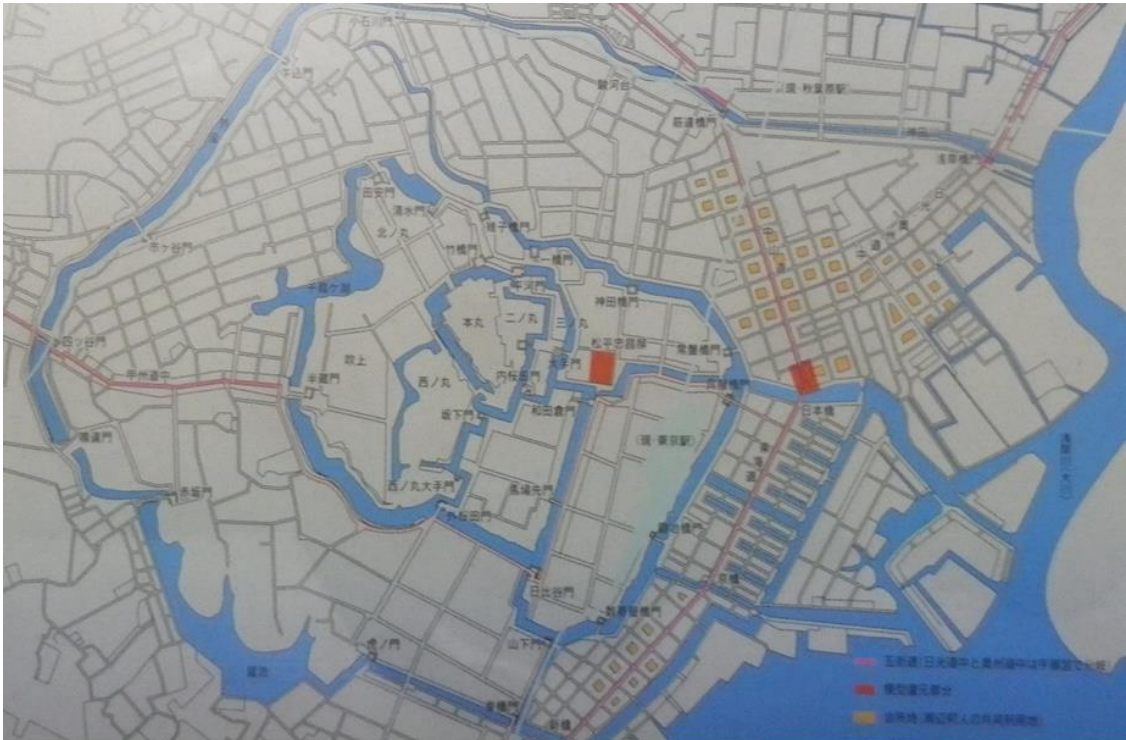
(皇居、二重橋)



(皇居、富士見櫓)

慶長5年(1600年)大きく分けて武闘派(東軍)と文治派(西軍)による臣下同士の対立によって関ヶ原の戦いが勃発。しかし、西軍から東軍への寝返りなどによって、たった1日で東軍の勝利が決定的となった。

慶長8年(1603年)徳川家康が後陽成天皇から征夷大將軍を任命され、江戸幕府を開いて江戸の本格的な発展が始まった。



(寛永時代、1624年～1644年の江戸城周辺の地図)

1603年(慶長8年)徳川家康が江戸幕府を開いたが、江戸を発展させるには港湾都市とすることが最良と考え、水運の為に河川や運河の整備を強化した。天下普請として神田台(現在の神田駿河台から大手町近辺)を取り崩し、今の丸の内である日比谷入り江や京橋地区の埋め立て及び水運のための堀川(日本橋川等)の整備が始まったとされる。飲料水確保のため井之頭を水源として隅田川に注ぐ神田川等も整備されていった。また東海道として、日本橋から京橋、銀座を経て塩留方面の街道も次第に整備され、<sup>もみじ</sup>楓川(兜町付近〈首都高速の江戸橋ジャンクション〉から京橋川の京橋ジャンクション<sup>あた</sup>辺り迄に存在した人工河川)は櫛状に船溜まりや魚河岸、蔵等が作られた。また現在の首都高速道路の京橋ジャンクション付近から汐留ジャンクション付近迄には東海道(銀座中央通り)の水掃けと、水運の為に同じく人工河川の三十間堀川を開削していった。

冒頭書いたように家康は天下普請として、沼地を浚渫<sup>しゅんせつ</sup>して堀や水上交通の為の河川を大規模に整備し、そこから出た土砂や神田台の土砂を取り崩して丸の内地区、現在の銀座地区等を埋め立てていった。



(神田川)

また関東平野(武蔵野)は沼地が多く、しかも現在の日比谷公園<sup>あた</sup>辺りが、日比谷入り江と言った風に、江戸の水は塩分が多く、生活用水がとても塩っぱかったので飲料水が極端に不足していた。

小石川上水に続いて井之頭や荒川から生活用水を引く為の神田上水も開削、整備されただけでなく、1653年(承応2年)荒川上水も完成して水道は江戸の自慢となった。この頃から、水銀<sup>みずぎん</sup>、<sup>すなわ</sup>即ち所謂水道利用料を保守管理する水元役に当初は支払っていたが、18世紀中ごろからは幕府直轄となり、幕府は組合を組織させ、そこから水銀<sup>みずぎん</sup>を徴収する事にした。日本では河川の水は主に飲料水、洗顔、洗濯等に使われ、使った水は木や野菜に掛けたり、打ち水に使われた。し尿などは肥料として高値で売買された為、下水道の必要性はこの頃は余り無かったと言える。



(隅田川から眺める神田川河口)



(隅田川からみる神田川)

初代将軍(1600~1605年)家康と2代目将軍(1605~1623年)秀忠はまた、江戸城の増改築、外濠川の工事等の城を取り巻く環境整備と共に、天領、親藩、譜代大名、外様大名の所領を決めた幕藩体制の下、政策決定組織の構築、三奉行の設置、武家諸法度、禁中並びに公家諸法度等(1615年)の法整備まで矢継ぎ早に打ち出した。



(肥樽)



(駿府城の絵図)

徳川家康は1605年に将軍を秀忠に譲ったのちは元の居城である駿府に居を構え、主に外様大名との折衝に当たりそれらを改易<sup>かいえき</sup>や移封<sup>いふう</sup>して、江戸幕府を強固なものにしていった。また、各地の藩には天下普請や参勤交代をさせて財力を消耗させた為に江戸幕府に逆らえる藩は無くなって行った。

改易<sup>かいえき</sup>とは大名、旗本、武士などから所領、城、屋敷を没収し、身分を剥奪<sup>はくだつ</sup>することを意味し、移封<sup>いふう</sup>とは、大名などの領地を他へ移す事を意味した。

徳川家康と二代目将軍秀忠(1605年～1615年)は大坂夏の陣(1615年[慶長20年])で豊臣家を滅亡させ、家康の死後(1616年)、秀忠は幕府の中枢を側近で固め、家康と同様に外様大名を次々に移封や改易を実行していった。

また徳川家康の4男松平忠吉(尾張藩主になる予定だった忠吉は世継ぎが無



(再建された駿府城の一部)



(皇居、百人番所)

いたため尾張藩を天領とし、死後は9男徳川義直)を1607年(慶長12年)尾張藩主、10男徳川頼宣を紀州藩の藩主(1619年[元和5年])、10男徳川頼宣を1603年(慶長8年)水戸藩の藩主に付けるが1609年家康のお膝元駿府に移封された後、11男、徳川家房が水戸藩主になり、ここに徳川御三家が成立した。

そのために移封や改易をされた藩主につかえる武士たちは忽ち浪人となって、日本各地の治安は少しずつ悪くなっていった。浪人は他の藩に召し抱えられる場合もあったが、商人や、農民、又は用心棒などに身を落とすものが多かった。

続く・・・・・・・・・・・・・・・・